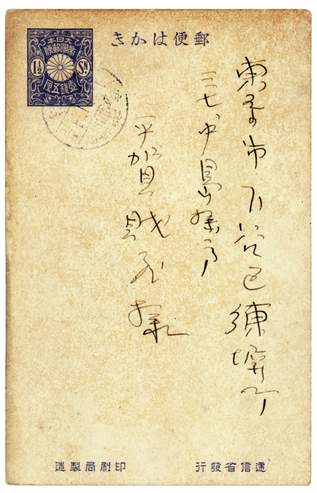
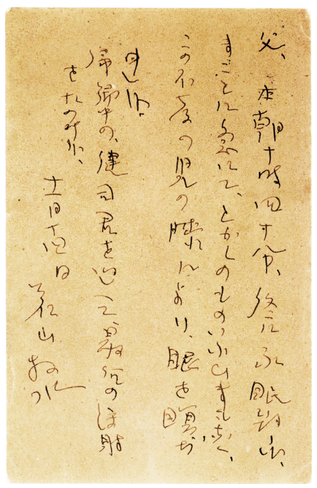
文学館だより

令和 8年11月 1日
若山牧水記念文学館
TEL 0982－68－9511
文責 日高 第127号

収蔵資料から

其の118 父の死を知らせる葉書





【執筆日】大正元年十一月十四日
【宛　先】東京市下谷区連堀町三七、中島様方
平賀財蔵様

父、本朝十時四十分、終に永眠致し候、
まことに急にて、とかくのものいふひまも奈(な)く、
この不孝の児の膝により、眼を瞑ぢ
申し候、
帰郷中の、健司君を迎へて、最後の注射
をたのみ候、
十一月十四日
若山牧水

明治４５年７月、父危篤の報を受け牧水は帰郷します。幸い父は大事にいたらず、次第によくなりつつありました。しかし、１１月１４日朝、脳溢血(いっけつ)で再び倒れてしまい、そのまま６８年の生涯を閉じます。

父の死後、親族から故郷に留まることを強く迫られる中、牧水は破調の歌を次々と詠んでいきます。

参照／『若山牧水伝』

牧水歌碑めぐり

其の119 牧水公園　うたの小路(こみち)

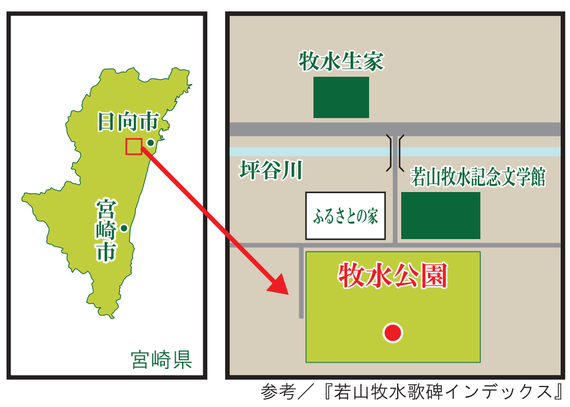


平成７年建立

大正７年、「利根の奥へ」という記事を読んで旅心をくすぐられた牧水は、利根川上流を目指して出かけます。この歌は１１月１６日、湯原(ゆばら)温泉（現　水上(みなかみ)温泉）から湯桧曽(ゆびそ)を経て谷川温泉に向かう時に詠まれました。山にはすでに雪が降り、晩秋というよりは冬という感じでした。

牧水公園には、うたの小径に沿って１０基の歌碑が建てられており、その中にこの歌の歌碑があります。牧水の愛したふるさとの風景を眺めながら、牧水短歌に親しむことができます。

（公園内には１１基）



参考／『若山牧水歌碑インデックス』

第31回若山牧水賞　決まる





受賞者　澤村斉美(さわむらまさみ)氏（歌人）
受賞歌集　『竜の眠つてゐた跡』

10月15日、第31回若山牧水賞が発表されました。京都府京田辺市在住の歌人、澤村斉美氏、受賞歌集『竜の眠つてゐた跡』。

澤村氏は京都大学在学中に京都大学短歌会に入会し歌作を始めます。現在は新聞社勤務、校閲記者としてご活躍です。なお、短歌結社「塔」に所属され、機関誌『塔』の編集委員、編集長も務めていらっしゃいます。受賞歌集は第3歌集となります。

私どもにとっては、授賞式翌日の文学館、生家来訪を楽しみにしております。

受賞歌集『竜の眠つてゐた跡』より

ものを読む夫のかたはらものを読む私は墓のごとく動かず
朝の日を入れればとなりのシーツには竜の眠つてゐた跡がある
生きたいと思ふまでそこにゐていいよ枯れ葉の香る公園に立つ
いつかまた二人に戻る時までの長い時間を歩みはじめつ

授賞式及び受賞祝賀会	令和9年1月28日（木）15：00～	宮崎観光ホテル（宮崎市）
受賞者学校訪問	1月29日（金）午前	宮崎県立日向高等学校
若山牧水生家・若山牧水記念文学館訪問		
受賞記念講演会	1月29日（金）午後	カルチャープラザのべおか

問い合わせ先　若山牧水賞運営委員会事務局　TEL　0985－26－7099

今年度から佐佐木幸綱さんに代わり、俵 万智さんが選考委員に就任されました。

「牧水写真帖」届きました　大切にします

「突然で失礼致します。最近新聞で“牧水賞”の記事をみて、古いものですがお送りさせて頂きました。ご不用でしたら、すみませんがそちらで処分して頂けますでしょうか。お手数かける事になるかもしれませんが、よろしくお願い致します。」という一枚の手紙とともに、大悟法利雄氏編集の『牧水写真帖』が送られてきました。状態も良く、大切にされていたことがよくわかります。住所も氏名も何も記載がありませんので、この紙面でお礼をお伝えいたします。

10月20日、『牧水写真帖』確かに受け取りました。文学館で大切に使わせていただきます。ありがとうございました。

新商品　手づくりポストカード　いかがですか(*^▽^*)



絵を得意とする理事が何かの役に立てばと、デッサンを持ち込んだことが始まりでした。

牧水先生の歌をイメージし絵筆を走らせたのは、西田宗吉さん（日向若山牧水顕彰会理事、東郷町在住）。事務局職員が牧水先生の歌を入れ、ハガキに取り込み一枚のポストカードに仕上げました。9月に開催した牧水祭に来られた方は封筒に入っていたかと思います。

いかがでしょうか。

1枚50円で販売させていただきます。

まだまだ種類は増えるものと思われます・・・

見学いただいた方には、名刺サイズにしたミニカードをプレゼントいたします。

若山牧水全集（増進会出版社）月報より　再開　第6話

第2巻月報（1992・11）　6　牧水の思い出（上）　鈴木　秋灯

裾野と牧水の話は30年間誰にも話さないできました。しかし、裾野市鈴木図書館の読書会で裾野と牧水の話をしてくれと言われてから、話してみる気になりました。この土地の人達も、牧水がどんな人なのかやっとわかってきて、歌碑も建ててくれたことですし。

牧水という人は、とても温かい人でした。私は、17歳の頃から短歌を始めました。百姓仕事をしながらも何かしら趣味がないとおもしろくない。短歌は、一番金がかからないし、時間もほどほどで済むと思ったので。それまでは他の先生の教えを受けていたのですが、牧水が沼津に越して来たのを知り、その庶民的な所に魅かれて師と仰ぐようになりました。

人間としての牧水は、よっぽど出来た人でした。だから、牧水と会った人はたいてい気持ち良く別れるのです。非常に好き嫌いがあったくせに、それを表に出さない人でしたからね。誰とでも、百年来の友達のように会うのです。

草履を履いて尻端折して先生と二人でよく旅をしたものです。全部歩くのですからね。旅に行くと、奥さんに何か買っていかなくては、旅に出たら土産を買うもんだよと言うので、しぼりをお土産に買ったりしました。

二人で撮った写真はひとつも残っていないのですが、一度だけ、写真を撮ったことがあります。湯河原から伊豆山へまわったとき、入江あり岬ありの道で相当辛かった。牧水が「少し疲れた傾向があるよ」と言い、「一杯飲みたい傾向ではないですか」「御名答」。そんな会話をしながら歩いたが、店がない。牧水の脚を考えて「乗合にしましょうか」というと、いつもはそんな物に乗ったことがないので、「節を屈してそうするか」と自動車に乗ったのです。伊豆山でうっかり降りそこない、熱海駅まで行ってしまった。まだ時間は早いし今晩の宿も決まっていないので、私の知人が梅園で茶屋を開いているのを思い出し、そこへ行ったのです。その知人は、歌を作る人だけあって「牧水先生を連れてきてくれた」と大変喜んで、洋酒を棚から降ろして飲ませてくれました。丁度花の盛りで、梅の木に下げる短冊を沢山集めてあって、それを見ながら写真を撮ろうということになり、写真機の前に立った。ところが、旅を終えてもなかなか写真が送られてこない。写真館に問い合わせると、その写真技師はその日の売上をみんな持って逃げてしまったと言う。フィルムも入れていない空の写真機の前に、真面目くさって立ったのかと後で大笑いしたが、今考えると残念で。

晩年の泊まる宿屋はたいてい一流の旅館でしたね。その方が安心だと言って。で、その晩は新築の熱海の玉の井に泊まったのですが、先生は風采もあがるほうではないし、尻端折の変な格好をしているのでいいところに通されない。また、宿帳にも決して牧水と書かず、沼津市市道何番地　若山繁と書くので、誰も牧水とわからない。私が警察に勤めている友達に、今晩牧水と玉の井に泊まっているから来ないか、と電話をかけたものだからやっと牧水と知れた。番頭が来て、「二階の部屋が空いたから移ってくれ」と言う。しかし先生は、「いや、ここで結構です」なんて言って動こうとしない。そのうち「僕も電話をかけてくるよ」といって立ったが、深刻な面持ちで戻ってきて「実はね、今うちに女性が来ていて、彼女、失恋の悲しみを訴えて泣きにきたんだよ。私がいなくてかわいそうなことをした」と言うのです。そして、気分をかえるためか「番頭さん、この部屋に芸者を呼んでもいいですか」というわけで、二人の芸者が来た。若い方の芸者が「このお座敷がすんだら吉井勇先生の座敷に行くのですけど」と言うと、「それは大変だ。もし吉井君のところへ行っても、私がここに居ることは言わないでくれよ。二人が合併したら、大変なことになってしまう」と言うのです。

しかし、結局芸者は吉井勇の座敷には行かないで、若い方が三味線に歌を書いてくれと言う。牧水は「今晩は酔っているから明日の朝書く」と。翌朝、芸者の置いていった三味線を見て牧水が、「あれはなんだ」と言う。「そりゃ、あれに今朝歌を書くと約束しましたよ」と答えると、「それは大変、逃げよう」。朝食を早くしてもらい玄関に出たところ、昨晩ずっと面倒を見てくれていた番頭が紙と硯を持ってきて、記念のために何か書いてくれと言う。牧水は筆をとって、「わらぢ履くひまに書けとふうたならばわらぢのひもを結びかねたる」と書いたものです。　（歌人）

次回は第2巻月報（1992・11）　7　牧水と郷土　渡邊　邦彦　を予定します。なお、表題前の数字は文学館だより掲載上連番とさせていただいております。

牧水先生の一首

折に触れて出会う一首を紹介しています

上つ瀬と下つ瀬に居りてをりをりに呼び交しつつ父と釣りにき

かみつせと　しもつせにおりて　おりおりに　よびかわしつつ　ちちとつりにき

「牧水」の名のつく橋を調べているという方から問い合わせの電話が入った。早速「牧水橋」に関する資料に当たった。「牧水橋」は昭和60年、牧水生誕100年の年に建立されている。左岸（牧水生家側）の欄干親柱にこの歌が掲げられており、旅人書とある。なお、右岸欄干親柱には、旅人の歌**「淵出でてかたくかはける一つ岩幼き父が鮎釣りし岩」**が掲げられている。旅人とは、牧水の長男、若山旅人のことである。

改めて、車を停めて一度見ていただきたい。

参照　『若山牧水全歌集』伊藤一彦編、『若山牧水歌碑インデックス』





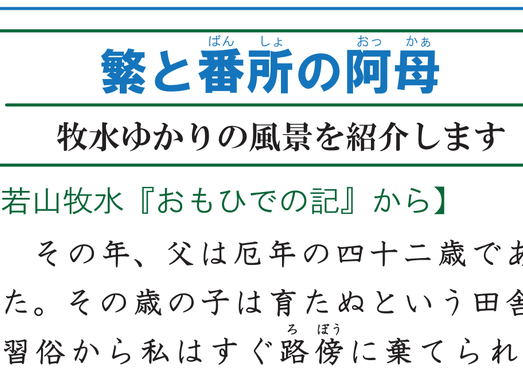
上つ瀬と下つ瀬に居りてをりをりに呼び交しつつ父と釣りにき
牧水

繁と番所の阿母(おっかぁ)

牧水ゆかりの風景を紹介します

【若山牧水『おもひでの記』から】

その年、父は厄年の四十二歳であった。その歳の子は育たぬという田舎の習俗から私はすぐ路傍(ろぼう)に棄てられた。路傍といっても我が家の土塀の裏門の前で、棄てらるると共に村での旧家奈須という家の細君に拾われたのである。その縁から私はこの細君を小学校の頃まで「番所(ばんしょ)の阿母(おっかぁ)」と呼んでいた。番所というのは旧幕時代にその家で何か役を勤めていた所からきた名であるらしい。（略）



生家と道を挟んだ場所にあった番所跡地（赤線付近）

すぐ上の姉シヅと繁との間には、三人くらいの子供があったが、惜しくも育たなかった。繁誕生の喜びの裏には、成長を心配する思いがあった。

そこで、土地の風習の「拾い子」で災難を免れることにした。いったん繁を裏門の桜の下に捨て、母親役の奈須チヨが拾って若山家に預けた。チヨの家が天領時代の番所だったことから、繁は「番所(ばんしょ)の阿母(おっかぁ)」となつくことになった。

参考／塩月眞『牧水の風景』

若山牧水記念文学館
〒883-0211　宮崎県日向市東郷町坪谷1271番地

■利用案内■
【開館時間】９：００～１７：００（入館は１６：３０まで）
【休 館 日】月曜日（祝日は除く）　年末年始（１２月２９日～１月３日）
【入 館 料】小・中学生／１００円　高校生以上／３１０円（２０名以上は団体割引あり）
【お問合せ】TEL　0982-68-9511 FAX　0982-68-9512【公式ＨＰ】https://www.bokusui.jp

〈ホームページはこちらから〉